

大隈言道自筆資料『自詠集中抄』

—— 小林重治家集 ——

進藤 康子

要 旨

江戸時代後期の福岡が生んだ歌人大隈言道に関する自筆資料の中から、飯塚歌壇における門下生の家集『自詠集中抄』を翻刻する。

まず始めに大隈言道について紹介する。言道は、寛政十年（1797）に生まれ、慶應四年（1876）に没している。享年71歳。福岡薬院抱安学橋の商家の二男で、通称清助、池萍堂と号す。若き頃は、黒田藩士の二川相近に師事し、和歌や書を学んだ。天保三年頃から、多くの弟子を持ち、野村望東、貞貫夫妻らも入門する。天保7年、言道は歌に専念するため、39歳で弟に家督を譲り、福岡今泉の池萍堂（ささのや）に隠棲する。当時、鞍手古門神社の伊藤常足が、筑前北部、苜屋、黒崎、下関などの地域の人々を教育していたのに対して、言道は、福岡を中心として下級武士や町人達の和歌の指導を行った。早良、糸島、姫島、福岡、久留米、田代、吉井、飯塚などに多くの門人を持った。

特に飯塚では、納祖神社の神官青柳家と親しく、また、亀井南冥

ゆかりの宝月楼の主人古川直道とも懇意で、それ故宝月楼は飯塚での歌会指導の折の言道の定宿であった。宝月楼と納祖神社の間には、遠賀川からの水をめぐらせて舟が横付けできた。言道を指導者として招いた古川直道、青柳直雄、そして、門下生筆頭的小林重治らが一緒に舟に乗り込み、風雅を楽しんだ姿が偲ばれる。小林重治は、酒造業を営み、言道の歌集『草径集』の出版の折には、最大の出資をし、援助を惜しまなかった人物である。

『自詠集中抄』は、この小林重治の歌集である。重治の詠草を、師大隈言道がまるごと浄書してやり、その上から更に朱で添削を行っている。言道の実作指導と添削の跡を細かく知ることができ、かつ、門下生への和歌指導の実態をも明らかにすることができる貴重な資料であるので、ここに翻刻し紹介する。

歌集の最後に、言道の丸印墨印「池萍堂印」があり、また蔵書印は、「飯塚 木村蔵」朱印。「木村家」は、小林家がもと木村家であったのを、後に事情があり家名をもどしたものである。重治には、『壬戌調撰』などの家集があり、言道の序で青柳直雄跋の紀行文『豊後の道記』、他にも言道との連作の歌集『荻葉集』が現在残っている。

翻 刻

(一) 凡例

- 一、架蔵本、大隈言道自筆門下資料『自詠集中抄』を底本とした。
- 二、和歌に一連の通し番号を付した。
- 三、表記はできるだけ底本の記載通りに翻刻することを基本とした。漢字平仮名も全て底本のままとした。
- 四、清濁は原本のままとする。
- 五、丁うつりは「で示し、丁の表裏はオ・ウと表示した。
- 六、明らかな表記ミスはその箇所にもママと記した。
- 七、破れ、虫食いなどで読めない箇所は、□□□ とした。
- 八、言道の添削の跡は、歌の右横に小文字で示した。みせ消は、その語句の右側に傍線を付した。添削とみせ消ともに朱書である。
- 九、五十六番歌下の句は、言道自筆の付僉が付されている。

(二) 書誌

- 一、印 「飯塚 木村蔵」朱方印
縦 三・二センチ 横 二・二センチ
「池萍堂印」丸印墨印
直径 二・六センチ
- 二、書型 縦 二六・八センチ 横 一九センチ

(三)

- 三、卷冊 一卷一冊 写本
- 四、丁数 墨付37丁
- 五、和歌一首二行書 一面 8行
- 六、表紙 題僉墨書直書「自詠集中抄 全」
題僉 縦 一八センチ 横 四・五センチ
- 七、料紙 楮紙

(三) 翻字

自詠集中抄 全」(表紙)

自詠集中抄

1. よをすてゝ人のいるへきおくやまは
いはさへこけのころもきにけり
2. やまさとのものさひしさに夕くれは
けふかたな引いちゝをそおもふ
3. ゆふたちのすきぬるあとのにはのおもに
すゝしく見ゆる夏くさのつゆ
4. 後の世のやみもしれかしはやせさす」(1・オ)
うふねのかゝりきえしくらさに

5. まちわふるわれにきかせよほとゝきす
いくこゑもとはおもはぬものを
6. たちさわくいちのみなかにおもひきや
はつほとゝきすおとつれむとは
7. とひかよふはたるのかけにさそはれて
さとのわらはのかはへいなれぬ あけく
8. くらきよもおのか影見るすゝしさに に (1・ウ)
みつのうへをもとふはたるかな
9. あさいせし人も見るらしはかくれに 中垣
しほれのこれる薺のはな
10. ほとゝきすなきもやするとかとの外に
いてゝもこよひ月さへもなし
11. おもふとちかとにうちいてゝすゝむまに 哉
いつこもどさすおとぞきこゆる のするまで
12. なくこゑはそらにきこえていけみつの に (2・オ)
13. たなはたのころもぬふてふはりにぬく
いとなかゝれとおもふよはかな
14. かいまよりみゆるなてしこわかにはに
さくはなよりもいろまさるかな らん
15. 大井川けさ立いてゝ見たせは
きりよりきりにいるいかたかな に (2・ウ)
16. わかれてはまたもあひつゝなみのうへに
むつまじけなるおきのあまふね たましまや
17. はやせかは照月かけのさしぬれは 川
さをたにとらてきたる 舟かな
18. よもすからさひしらにして波の上に
あまのいさりひ見えみ見えすみ
19. 吹風のいかにもしらてあしひきの
山のもみちのちりのこるらん に (3・オ)

20. 今はとておきてわかるゝたもとより
こほれそめたるみちしはの露 れゆく
21. くるしくもいつまでかみにいのるらむ
おもひそめすはかゝらましやは
22. よと川のきしの柳のいと見れは かけをおほみ
にみれと
- けふのふなちのあきたらぬかな
23. いさきかむやまほとゝきすわかやとの
まつをいつしかすきはらになく」(3・ウ)
24. ほとゝきすなくねをきくとあり明の
月かたふくもしらぬよはかな
25. そらにますたなはたつめも地にあらは
いくともならむほしにやはあらぬ
26. よやふけしよへとこたえぬわたし守
かはへはむしのこゑはかりして
27. あきのゝに花さく見れはもみちはに
おとらぬはきのにしきなりけり」(4・オ)
28. さけるやとおひもまたせてねやのとを
あくればひもをともし朝顔 さへゆはす
29. しはしわかものとそおもふとなりより
垣をこえこし朝かほの花 己かくこそなりにけれ
30. いなつまのひかりにぞ見る秋風の のまな ものなれや
そなたにちかき
- おとするかたのまつのみら立
31. いねのはのすゑよりほそくなる物は
秋の夕のこゝろなりけり」(4・ウ)
32. ちゝはゝのひたわたをさへけかしてし
ことそしらるゝわか子そたてゝ
33. いろかへぬ松のすかたもしくれふり
あらしふくひは安からなくに
34. たつねきし こ 山の もみちかたにもあはすして は かひなくて
いくたひ し なるらん
- あひぬる山のはつしくれかな
35. ときのまにしくれの雨やへたつらむ
みねは見えずもなる山へかな」(5・オ)

36. こゑをたにきくもさむけき白鶴は
しものふすまにいてやあるらし
37. はるのくることやちかきとうれしさに
えみそめつらむうめはさきてゝ
38. わかむねのおにはおふともたちさらし
よにいかきめをうちつくすとも
39. 立そむるかすみとゝもにはるくれは
あかすのこして冬はいにけり」(5・ウ)
40. ねのひにもまつ引人のなき世故
こゝろはかりに山を見る哉
41. 見わたせはたかねすそのゝやま桜
はなになれとやかすみたな引
42. いつくよりたちきたるらむからころも
すそ野もみねもかくすかすみは
43. たかねにはゆきのこりけりさと人の
けふかたてつゝすそのやけとも」(6・オ)
44. ちることはのかれさりけりさくらはな
うきよをよそのそらにさけ^れとも
45. 夕ひはりくもよりおつるかけを見て
わかとまりをやいそく旅人
なのはなにうまのかくれゆくところ
46. なのはなのなかにいなゝくこゑはあれと
こまはいつこをすきてゆくらむ
わたし船をまつまにあなたの岸に」(6・ウ)
はなあり
47. わたしふねおそきも何かまちわひむ^{くよするをなくさめて}
かはへたてゝも花のみゆれは^{なり}
49. かつらかた海のなかみちいつよりか
人すむさとゝなれるなるらん

50. きさらきの花ちるそらのゝとけさに

はひはかりなるねやの埋火」(7・オ)

51. やまかつもさとのうきねはやかなくに
はるさめふりてもゆるさわらひ

52. なにしおはゝ垣ともなりてかきつはた
くれゆくはるをこゝにとめなむ

53. こゝろにはおもひもすらしゆくはるを
をしともいはぬいろの山吹

ちゝ君の六十の賀 うめによす

54. おい木とてなにいとふへきうめのはな
かをりも色もおとりやはする」(7・ウ)

55. なつのきてすゝしき風もちりのこる
けなれと

花にはいとふものにそありける
里の下風

56. ほとゝきすまつよかさねて更ぬれは
なにゆゑにやと人もこそとへ

57. そらになく山時鳥ありあけの

月のうちよりこゑのおちくる

58. いさこゝにすまゝくほしやよのちりの
おかぬみやまのこけのむしろに」(8・オ)

59. あきくれはうれしかるへきこゑたてゝ
すゝめもあさるいなむしろかな

60. このうちにこめられにけるほたるこそ
とひかふそらやおもひこかれめ

61. さみたれのはれにしけふはをちかたの
まつのゝすまて見えわたりけり

62. わかにはのひときのまつをふく風に
まくらへちかきむらさめのおと」(8・ウ)

63. ひとすちのいとをいかせよまかせてそ
とゝまるかたにくものゆくらむ

64. 故郷のなしにあさ衣しみつもて
さらしゝゆゑかすゝしかるらん

65 若竹のはす糸のつゆやおもからん
あしたの風にかたなひきする

66 もろともに山をいつらむ山のはの
あさ日のかけになくほとゝきす
「(9・オ)

(つづく)